読書

東北の本棚

てんでんこ　未来へ
災害生き抜く知恵探る

岩手日報社　編

岩手日報が2016年1～6月に掲載した連載企画「てんでんこ　未来へ」など、同社の東日本大震災に関する5年間の報道をまとめた。津波の時は他人に構わずめいめい逃げろという三陸地方の言い伝え「津波てんでんこ」の意味を掘り下げ、震災後にその教えが地元や国内外でどう受け止められ、広がっているのか追った。犠牲者の行動分析や、各界の著名人が寄せた鎮魂のメッセージも掲載。一連の報道は同年の新聞協会賞（編集部門・企画部門）を受賞した。「震災を絶対に風化させない」という意気込みが伝わってくる、中身の濃い一冊だ。

連載企画は16年元日から全7部計42回にわたり掲載された。迅速な避難に成功した岩手県内の学校や地域、混乱の中で犠牲者を出した事例、「てんでんこ」の言葉を生んだ明治、昭和の三陸大津波の教訓を丹念に取材。インドネシアなど海外の大津波被災地にも足を運び、生き残るための知恵の在り方を探る。

自分の身は自分で守るという教えは、他人を見捨てて逃げる冷たい行為とも受け取られかねない。目の前に災害弱者がいたら、あるいは家族と離れ離れだったら、構わず逃げられるだろうか。本書はそうした葛藤を踏まえつつ、「てんでんこ」とは「周りの人にも避難を呼び掛けながら逃げる」「事前に避難方法を相談しておく」など、重層的な意味を持ち合わせた「共助」へと深化した言葉だと解き明かす。

犠牲者の行動記録は、首都大学東京の渡辺英徳准教授（情報学・芸術工学・デザイン）の研究室と共同で、地震発生から大津波襲来までに犠牲者がどう行動したかを地図上で再現した。遺族の協力が得られた1326人の行動を、陸前高田市、釜石市など地域ごとに分析。半数超の54・9％が自宅にとどまり、亡くなっていたことを浮き彫りにした。行動記録は動画でインターネット上で公開している。

岩手日報社019（653）4111＝1620円。

やがて死ぬけしき
不安克服の心構え説く

玄侑　宗久　著

福島県三春町の臨済宗福聚寺住職で芥川賞作家の著者が、現代の死生観や臨終について講演した内容を基に書き下ろした。

タイトルは松尾芭蕉の俳句「やがて死ぬけしきはみえず　蝉（せみ）の声」から取った。蝉はその短い命を気にすることなく、死の直前まで懸命に鳴く。なんと見事な生き方、死に方か―。「知りようのない未来は憂えず、過ぎ去った過去は悔やまず」と諭し、「やがて死ぬ景色」をじっくり眺め、死への洞察を深めようと誘う。

「終活」の名のもと、葬儀の商品化が進む現代。変わりゆく墓事情、エンディングノートの普及など、葬式や墓が個人化する現状に「私」へのこだわりを見て取る。古事記や万葉集をひもときながら「我々は日本人の根ともいえる大事なものを置き去りにしている気がしてなりません」と著者。

「往生」「あの世」「天寿」など、独特の感性を生んだ日本人の死生観は資本主義の潮流にもまれ、大きく揺らいできたとの危機感を持つ。荘子の思想や良寛の輪廻（りんね）観などにも触れ、「私」から自由になる大切さを説く。

東日本大震災後の社会情勢について考察を続ける著者。「震災と死」の章では、行方不明者が多く、遺体と対面できない遺族の悲しみ、幽霊の目撃談などに言及。祈りの尊さを教えられる。

ターミナルケア（終末期医療）からがん治療薬の話まで、死の様相を幅広く伝え、不安を克服する心構えを示した。

著者は1956年三春町生まれ。2001年「中陰の花」で芥川賞。11～12年、政府の東日本大震災復興構想会議委員を務めた。

サンガ03（6273）2181＝918円。

親子でえほん
クレヨン色の村のひみつ

本多　菜緒　作
フクモト　ミホ　絵

冬になると雪かきに追われる、雪深い村が舞台。雪かきに疲れ、村人同士のけんかが絶えないのを見かねて、雪の妖精が神様に「あの雪を降らせてください」とお願いする。

ある少女が「ゆきんこ　もりもり　ゆきんこ　もりもり」とお父さんと一緒に唱えると、空から赤、青、黄色、緑と、クレヨンのようなカラフルな色をした雪が降り出した。雪の美しさに心を奪われた大人たちは、けんかをやめて楽しく雪かきをするようになる。

「ゆきんこ　もりもり」。村人は冬になる度、合言葉を唱え仲良く雪かきをするようになった。ファンタジーな絵を見ながら魔法を何度も口ずさむと、不思議と顔がほころんでくる。

作者は1969年生まれ、青森市在住のフリーライター。著書に詩集「恋してみませんか」など。絵はフリーのイラストレーター。

文芸社03（5369）3060＝1080円。

ハリー・ポッターと呪いの子

J・K・ローリング
ジョン・ティファニー　著
ジャック・ソーン

世界で4億5千万部という途方もない発行部数を誇る「ハリー・ポッター」シリーズの最新刊が、満を持して発売された。

すぐに100万部を超えたことが話題となったが、これまでハリポタを読んでおらず、この本に手を出していいのか迷う人もいるだろう。そんな読者のニーズを見越し、今まで一冊も読んだことがない記者が、予備知識なしで本書に挑んだ。

冒頭に「第一幕」と書いてある。本書は英国で上演されている舞台劇の脚本なのだ。せりふだけなのでリズミカルに物語が進む。

前作「ハリー・ポッターと死の秘宝」の戦いから19年後。37歳になり「魔法省」の要職に就いたハリーと、その次男アルバスが主人公だ。

長年のハリポタファンであれば、「ハリーも年をとったなあ…」と感傷的になり、若かりし頃を思い出してページをめくる手が止まるのかもしれない。でもシリーズを通じて初めて読む人は、壮年のハリーにも違和感はない。得した気分である。

年頃のアルバスにとって、「闇の帝王」を打ち破り、英雄視される父親の存在は大きく、プレッシャーとなる。自分の「出来の悪さ」を呪い、父親に怒りをぶつける。

さらにアルバスは、ハリーの学生時代に「闇の帝王」の一味に殺された男の子の運命を変えようと、魔法の道具「逆転時計」を使って過去にタイムスリップする。

ハリーが「助けられなかった」男の子を救い、鼻を明かしてやろうと考えたのだが…。

キャラクターの個性が生き生きと感じられ、目の前で演じられていると感じるほど完成度が高い。読みやすく、本書からスタートしても大丈夫だ。

版元が「立ち読みしてから買う人が多い」というのも納得できる。19年後からさかのぼって、シリーズを最初から読み始めたくなった。

（松岡佑子訳、静山社・1944円）

話題のほん
◇ここからスタート可◇

（村）

仙台（金港堂調べ）

①写真アルバム　仙台市の昭和（近代仙台研究会編）　いき出版　9990円
②TBCみやぎ手帖2017　東北放送　1500円
③ブラタモリ　3　函館　川越　奈良　仙台（NHK「ブラタモリ」制作班監修）　KADOKAWA　1512円
④夏目漱石（十川信介）　岩波書店　907円
⑤新しい学力（齋藤孝）　岩波書店　886円
⑥笑って、泣いて、考えて。永六輔の尽きない話（さだまさし）　小学館　1080円
⑦「カエルの楽園」が地獄と化す日（百田尚樹、石平）　飛鳥新社　1400円
⑧九十歳。何がめでたい（佐藤愛子）　小学館　1296円
⑨サイコパス（中野信子）　文芸春秋　842円
⑩ハリー・ポッターと呪いの子（J・K・ローリング、ジョン・ティファ